

中山晋平の新民謡（二）―野沢温泉小唄

大月 和彦

中山晋平が作曲した新民謡「須坂小唄」が有名になると、各地から作曲の依頼が相次いだ。地元の中野小唄、三朝小唄、十日町小唄、東京音頭(原題丸の内音頭)などは流行歌としてヒットした。

地方民謡の名曲とされる信州の野沢温泉小唄は、昭和五年冬同地で初めて開かれた明治神宮スキー大会を記念して作られた。村では、開催が決まると観光客誘致の目玉に民謡をつくることにして、若いころ隣村の小学校で教師をしていて時々湯浴みに来ていたという晋平に作曲を依頼した。

同年一月、晋平は作詞家時雨音羽、舞踊家藤間芳枝らと信越線豊野駅で飯山線に乗り換え、千曲川に沿って北上し、雪深い上境駅で降りた。千曲川を渡船で渡る。対岸で待っていた野沢温泉関係者が曳く箱橋に乗って温泉に向かった。

「常盤屋に宿をとり、明日までに仕上げよと私に命じた中山さんは次の間で寝てしまったが、そのいびきの大きなこと、とても歌どころの気分にならず思い悩んでいると、遠く近くチャラチャラツと水の音が聞こえ、それがいびきの合間を縫って、リズムをつくり、メロディーとなって如何にも妙だ。外へ出てこの水の流れに沿って雪の街を歩くこと数十歩、数百歩、何ともいえない旅愁を感じ、一節ができ、この水音が囃子となった。…めったにほめたことのない中山さんもこの歌には手を打ってくれ、たちまち曲が出来上がり、振りもついて、その夜みんなで踊った。…この曲は中山さんとコンビで作った数編の地方民謡のうち最も思い出深い一つである。」と時雨が語っている。(『信濃教育』第九四七号)。

千曲わたればナ野沢の出湯ヨ

わたり鳥さえ知らぬ鳥さえ寄るものをヤレサノサ

ユラユラユラリは湯の煙

チャラチャラチャラリは水の音

ササチャラリトナ

常盤屋は、温泉街の奥にある木造五階建ての老舗旅館。隣に野沢温泉のシンボル「大湯」の宮殿風の湯屋があり、その上屋から湯煙りと温泉の匂いが出ている。街中に流れる水の音と湯治場の雰囲気をかもし出している。